

# 淀川とワンド

## 淀川の舟運

淀川は、河川法上は琵琶湖から大阪湾までの全長75kmをいいますが、一般的にわれわれが淀川を指すとき、八幡の三川合流(桂川・宇治川・木津川)地点から大阪湾までの37kmをいうことが多いようです。



■三十石船  
(資料:財団法人 アダチ伝統木版画技術保存財団)



■明治時代に登場した蒸気船 (資料:淀川資料館)

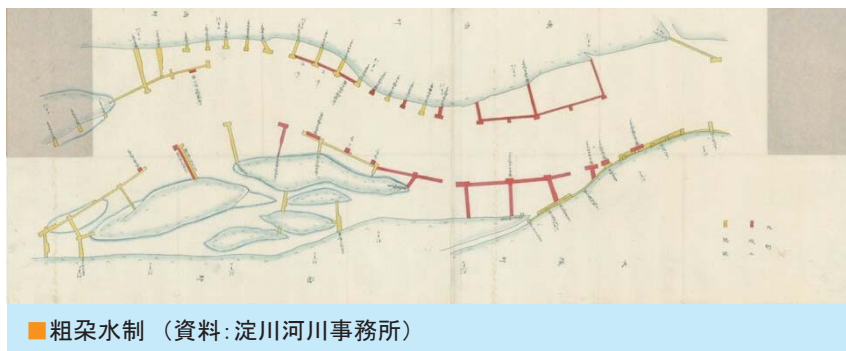


■フィールドワーク(平成21年6月24日)

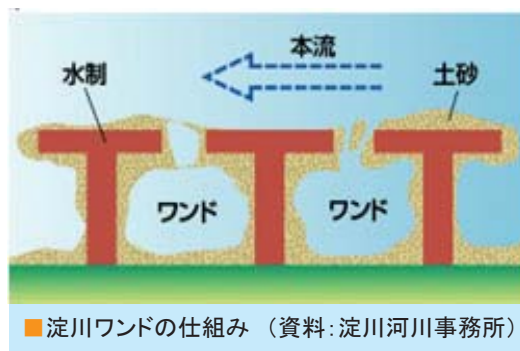
淀川は古くから交通の要衝として栄え、江戸時代には三十石船(乗客定員28名程度、米を三十石積めることからそう呼ばれた)が京都伏見と大坂をつないで盛んに人と物資を運んでいました。明治時代に入り蒸気船が登場し、淀川の舟運は新しい時代に入りました。

航路は大きな船が通れるように一定の水深を保つ必要があるため、オランダ人技師デ・レーケにより、土砂が堆積しない仕組みの水制工<sup>そだ</sup>粗朶沈床<sup>そだ</sup>が<sup>そだ</sup>つくられました。これにより水路を曲げて水の流れの速さを制御し一定の水深(1.5m)を保つことができました。

※【粗朶沈床】<sup>そだ</sup>粗朶(里山の雑木から伐採した木の枝)や下草を編んだものを何重にも積み重ね、その上に大きな石を載せ河岸から川の中央に向かって垂直に突き出した形で底に沈める工法。



■粗朶水制 (資料:淀川河川事務所)



■淀川ワンドの仕組み (資料:淀川河川事務所)



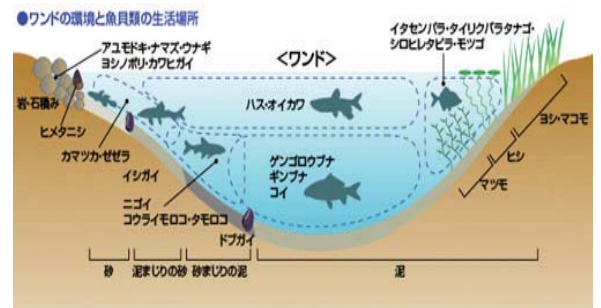
城北ワンドは、粗朶沈床による水制工事で囲まれたところに土や砂がたまり、その上に水際を好む木や草が茂り、結果としてワンドの形ができました。ワンドの水は地下で本流と行き来し流れもおだやかで、池などに棲む魚にとっては都合良く、水辺の植物の生えているところは魚の産卵や稚魚が暮らす絶好の棲み処となっています。

■城北ワンド群 (写真: 淀川河川事務所)

【ワンド】 河川改修の結果できた本流沿いにある水のたまっているところで、本流とつながっているか、或いは増水すれば連なってしまうようなところをいい、本来水の力によって自然にできる「たまり」と区別されている。ワンドは淀川全体で55個あり、城北地区には19個が集中している(2009.3)。

そこには、国の天然記念物・国内希少野生動植物種に指定されているイタセンパラやアユモドキが生息していましたが、環境の変化(悪化)により最近のワンド調査では見つからなくなるほか、在来種が激減しています。淀川の生態系の象徴とされるイタセンパラは、淀川河川事務所をはじめ関係団体・研究者により定期的に調査および観察が行われていますが、2005年に確認されたのを最後に昨年2009年までに1匹も確認されませんでした。

環境悪化の要因として、ブラックバスやブルーギルの外来肉食魚が放流され在来種が食べられてしまったこと、水位の上昇などによりワンドが深くなり産卵に適した浅場がなくなったこと、ここ数年来のボタンウキクサなど外来水草の異常繁殖やビニール袋などゴミが底に溜まり産卵場所としている二枚貝が育たなくなったことなどが原因と考えられています。〈原田 禎文〉



(資料: 淀川河川事務所)



【イタセンパラ】 タナゴの仲間で全長10cm、体高が高く平べったい淡水魚で、二枚貝(イシガイ、ドブガイ)に産卵する。産卵期の雄には「婚姻色」と呼ばれる赤紫を基調とした美しい色に彩られる。

淀川の歴史、役割、環境など、いろいろなことについて知りたい方は、枚方市にある「淀川資料館」をぜひお訪ねください。

入館無料

淀川資料館 枚方市新町2-2-13 TEL: (072) 846-7131

- 参考文献 1. 淀川河川事務所発行冊子・資料  
2. 淀川資料館パンフレット・資料